

教育実習の現状と課題

高橋 一 榮*

本調査は、新潟大学教育人間科学部の学生の教育実習に対する実態を把握し、もって、附属校における教育実習改善の方向を探ること、および学部における教育実習事前事後指導と教育実習との連携の問題点を明らかにし、その改善策を探ることを目的としている。1999年度2年次観察参加実習および3年次秋期教育実習を対象に質問紙により調査を行った結果、教育実習の果たす役割が予想以上に大きいことが明らかになった。また、学部における教育実習事前事後指導と教育実習との関連を、これまで以上に図っていくことが必要であることも明確になってきた。

キーワード：教育実習、観察参加実習、教育実習事前事後指導、IP/TV、VTR

1. 調査目的

学校教育は大きく変化してきている。新しい世紀である21世紀には、総合的な学習が小・中・高等学校に導入されるなど、これまでになかった教科の枠をこえた新しい教育活動が行われるようになると思われる。

このような変化の時代にありながら、学校教育における諸活動、とくに、各学校や大学での教育実習に関する活動は大きな変化をみせていない。むしろ、旧態依然とした教育実習や学部における事前事後の活動が行われているのが実態であり、これでは、変化の激しい時代の教育に対応できる教師を育成することは不可能である。

そこで本調査では、新潟大学教育人間科学部学生の教育実習について実態を明らかにし、そ

*新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校副校長
Vice-Principal. Niigata Junior High School
Affiliated with the Department of Education
and Human Science Niigata University.

5214, Nishi-ohata-cho Niigata-city, Japan

〒951-8535

の実態に応じた、今後の教育実習のあり方を探る。

あわせて、教育実習と密接に関連する、学部における教育実習事前事後指導のあり方についても、改善策を探ることを目的とする。

2. 調査内容

本学教育人間科学部学生の教育実習に対する問題意識の調査を内容とする。

主な調査項目は以下のとおり、詳細は、本論文末尾の質問紙を参照されたい。

- (1) 教育実習
 - ア 教職希望の有無
 - イ 教育実習の充実度
 - ウ 教育実習経験後の進路の変化
- (2) 観察参加実習
 - ア 教職希望の有無
 - イ 教育実習の充実度
 - ウ 観察参加実習経験後の進路の変化

以上の主項目について、教育実習生および観察参加実習生について、問題意識を探ることにした。

3. 調査方法

- (1) 調査実施期間
 - ア 教育実習………1999年10月16日
 - イ 観察参加実習…1999年11月10日
- (2) 調査対象者
 - 教育実習（3年次） 34名
 - 観察参加実習（2年次） 103名
- (3) 実習期日
 - ア 教育実習
 - 1999年10月4日～10月16日（10日間）
 - イ 観察参加実習
 - 1999年11月8日～11月10日（2.5日間）

4. 基礎資料

4.1 教科別男女別人数

(1) 教育実習

国	社	数	理	音	美	保体	技家	英	別	計
男	1	3	0	0	1	1	2	2	0	11
女	3	2	2	2	4	2	1	5	0	23
計	4	5	2	2	5	3	2	7	2	34

(2) 観察参加実習

国	社	数	理	音	美	保体	技家	英	計	
男	3	11	6	6	2	2	1	2	2	38
女	9	21	2	5	12	6	1	0	6	65
計	12	32	8	11	14	8	2	2	8	103

4.2 主専攻・副専攻別人数

(1) 教育実習

国	社	数	理	音	美	保体	技家	英	別	計
主	2	4	2	2	5	3	2	7	2	31
副	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3
計	4	5	2	2	5	3	2	7	2	34

(2) 観察参加実習

国	社	数	理	音	美	保体	技家	英	計	
主	6	25	8	11	13	8	2	2	8	88
副	6	7	0	0	1	0	0	0	1	15
計	12	32	8	11	14	8	2	2	8	103

5. 結果と考察

5.1 教職希望の有無

(1) 教育実習

【全体】

教職希望あり 65%	希望なし 35%
---------------	-------------

【教科別】

	教職希望あり	希望なし
国語	50%	50%
社会	80%	20%
数学	100%	
理科	50%	50%
音楽	40%	60%
美術	33%	67%
保体	100%	
技術	0%	
家庭	60%	40%
英語	100%	
別科	100%	

(2) 観察参加実習

【全体】

教職希望あり 57%	希望なし 43%
---------------	-------------

【教科別】

	教職希望あり	希望なし
国語	75%	25%
社会	41%	59%
数学	75%	25%
理科	73%	27%
音楽	57%	43%
美術	50%	50%
保体	50%	50%
技術	100%	
家庭	50%	50%
英語	66%	34%

【考察】

- ・教職希望の有無について、教育実習生（3年次）は65%が教職を希望している。観察参加実習生（2年次）は、およそ7%が教職を希望している。
- ・教科別にみると、2年次実習生では、社会・音楽・美術・保健体育・家庭などの教科で教職希望が少なくなっている。その傾向は、3年次実習生についても、ほぼ同様なことが言える。
- ＊教職希望が少ない教科では、教育実習の内容を、全員が教職希望であることを前提とした内容から、変える必要はないか。

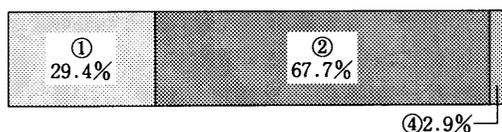
5. 2 教育実習の充実度について

教育実習・観察参加実習の充実度について、評価項目を設定し、その項目ごとに概要をまとめて記述した。

《評価項目》

- ①大変充実しており、得るものが多かった
- ②苦労は多かったが、得るものもあった
- ③苦労ばかりが多く、得るものがあまりなかった
- ④毎日がゆううつで、得るものはなかった
- ⑤良かったとも、悪かったともいえない

(1) 教育実習



【主たる理由】（記述はその概要。数字はその実数）

① 「大変充実しており、得るものが多かった」

ア 学校の受け入れ態勢

- ・教職員や生徒など、学校全体が実習生を歓迎してくれていると感じることができた。(8)
- ・生徒のみなさんに、大変あたたかく迎えて

ていただいた。(2)

イ 指導体制

- ・指導してくださる教官が熱心で、しかも学生の主体性を尊重してくれた。(7)
- ・授業時に自分たちで反省し、それに指導教官の意見を加えてもらった。それが大変勉強になった。(4)

ウ 実習授業

- ・最初授業がうまくいかなかったが、指導を受け、どこをどのように変えたらよいか分かり、少しずつ授業がよくなった。(7)
- ・小学生と中学生の違いがよくわかり、学習者の支援をどこまで行えばよいか、生徒達に任せるか、などがわかってきた。(5)

- ・実際に生徒を前にして授業を行うことで、発問・机間指導・板書などから、講義だけでは学べないものを学ぶことができた。(5)

エ 生徒理解

- ・少しずつ生徒と関わるできるようになり、生徒の心理がわかるようになってきた。(4)
- ・清掃時など思いきって生徒に話しかけたら、気軽に話すことができた。(3)

② 「苦労は多かったが、得るものもあった」

ア 実習授業

- ・指導案を書くことが、予想以上に難しく苦労した。(12)
- ・教官の授業や他の実習生の授業を見らうちに、授業で困ったときの対応がわかってきた。(7)
- ・実習を進めるにつれ、よい指導案を書くための時間が多くかかり苦しかった。(5)

イ 生徒理解

- ・得ることよりも、生徒との心のすれ違いに心を悩ませた。(4)
- ・完歩大会などの行事で生徒と一緒に活動でき、そこから学ぶことが多かった。(3)

ウ その他

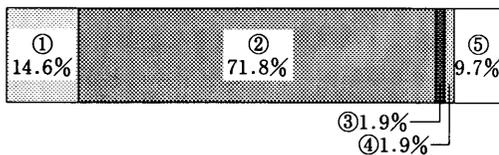
- ・忙しくて寝る時間がなかったけれど、自分の勉強不足や力不足を実感できたし、今まで思ってもみなかったことに気づいたりすることが多くあった。(2)
- ・教師になるつもりはなく実習に参加したが、いざ実習が始まってみると、私の大学生活で最も充実した2週間であり、いやなこともあったが、それ以上に感動するできごとが多くあった。(2)

④ 「毎日がゆううつで、得るものはなかった」

- ・教師としての技量不足を感じた。

(1: 教職希望なし)

(2) 観察参加実習(評価項目は教育実習と同じ)



【主たる理由】(記述はその概要。数字はその実数)

① 「大変充実しており、得るものが多かった」

ア 観察参加実習授業

- ・中学生の時に受けた授業と、観察した授業は大きく違っていて、教育の方向が変わっていると実感できた。(19)
- ・自分の担当教科で素晴らしい授業を観察できて、大いに刺激された。(7)
- ・授業がおもしろく、生徒の反応もすごくよくて、私が理想とする授業をたくさん見ることができた。(3)
- ・現場の授業が構築的であり、よく考えられていることがわかった。(3)
- ・毎日新しいことの発見があり、参考になった。(2)
- ・自分の中であいまいだった生徒像・教師像・学校像をしっかりとみることができた。(2)

イ 生徒理解

- ・いろいろな子どもと話すことができ、給

食・清掃・部活動等で生徒と行動を共にすることができた。(8)

- ・私としても、とても楽しんでやれた。生徒といろいろな活動できたし、中学生に戻った感じがした。(5)
- ・疲れたが生徒を第3者的に客観的に見ることができ、生徒の様子をじっくり観察できた。(3)

② 「苦労は多かったが、得るものもあった」

ア 観察参加授業

- ・授業を5限も立ちっぱなしで観察するには疲れた。しかし、授業は新鮮だった。(18)
- ・授業のどこをどのように観察したらよいか迷った。そのくらい授業が自分たちの時と変わっていた。(7)
- ・教える立場で授業に参加し、すべてが新鮮に感じられた。(5)

イ 生徒理解

- ・なかなか生徒と話すことができず、3日間苦労した。(19)
- ・大学の授業で中学生についていろいろ学んできたが、実際に中学生を目の前になると、その対応に苦労して大変だった。しかし、少しずつ生徒の考えることがわかってきた。(8)

ウ その他

- ・朝早く起きたりするなど生活のリズムが違って肉体的にも疲れた。(29)
- ・学生でなく教師(社会人)として扱われるため不慣れな面が多く、精神的にも疲れた。(20)
- ・帰宅してからの日誌や記録の清書など、慣れない作業が多く疲れた。(19)
- ・着任式での校歌、離任式での生徒の合唱に感動した。(8)

③ 「苦労ばかりが多く、得るものがあまりなかった」

- ・もっと生徒とのコミュニケーションがと

れるはずだったのに、消極的で、有意義な時間が過ごせなかった。

(1:教職希望あり)

- ・教師の意図は理解できたが、その時々での子どもの反応をみても、その反応がよくつかめなかった。(1:教職希望なし)
- ・子どもと接することが想像以上に難しかった。楽しいと感じることはできなかった。(1:教職希望なし)
- ・時間が早く感じられ流れるように過ぎていった。眠さにも勝てなかった。

(1:教職希望あり)

④ 「毎日がゆううつで、得るものはなかった」

- ・各教科の教師の人数が少ないせいか、日を追って授業の退屈度が増した。同じ教師は違うクラスにいても、結局は似かよった授業を見ることになった。

(1:教職希望なし)

- ・どう生徒と接していいかわからなかった。自分が中学生の時は教師という存在をプラスにとらえず排除するイメージがあり、教師という立場になりたくなかった。

(1:教師希望なし)

⑤ 「良かったとも悪かったともいえない」

- ・実習期間が短く、自分の考える活動が十分できなかった。(15)
- ・教科の学習では大変参考になったが、生徒と十分接することができなかった。(5)

この項目については、考察をあえて加えなかった。記述された概要をみると、その傾向をとらえることができる。

5. 3 教育実習の内容別充実度

教育実習期間中に行われる、

- ・オリエンテーション等
- ・教科指導
- ・学級指導

について、教育実習では5つの項目で、観察参加実習では4つの項目で、その充実度を下記の4段階の選択肢で問いかけ、その主な理由も記述することとした。

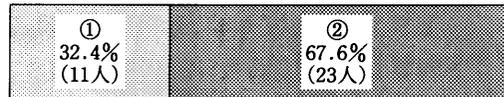
《評価項目》

- ① 十分満足できる
- ② かなり満足できる
- ③ ややものたりない
- ④ 不満である

(1) 教育実習

ア オリエンテーション (50分) 担当実習主任

実習の心構え、社会人・教師としてのマナー、日程等の説明、日誌記入、係・担当決定など



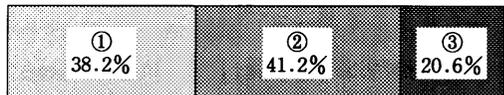
【主たる理由】

- 説明がわかりやすく、的確で丁寧だった。
- 学校や生徒の生の声を聞かせてくれたから、不安が少しなくなった。
- ×もう少し時間をかけて丁寧に説明して欲しかった。

イ 授業と指導案 (50分+放課後)

担当 研究・教科主任

学習指導の新しい方向、学習指導で留意すること、指導案の書き方など



【主たる理由】

- わかりやすい見本の資料を配ってもらったり、授業参観で一度指導案を書くなど練習する機会を与えてくれたから。
- 一方的に説明されるだけの授業でなく、自分たちで作業できたから。

×もう少し具体的に指導案の書き方を、教科ごとに教えて欲しかった。

ウ 当校の教育 (50分) 担当 副校長

〔新しい教育の動向、当校の教育のめざす方向、教師として留意することなど〕



【主たる理由】

- 学校の方針を簡潔に説明されたから。
- 先行的な教育の考え方が理解できたから。
- ×公立校でこのような教育ができるのか、疑問に思ったから。

エ 教科指導 (授業時・毎日放課後)

担当 教科担任

〔教科のめざす方向、教科別指導案の書き方、教科担任として留意すること、実習授業・指導案の検討、授業後の協議など〕

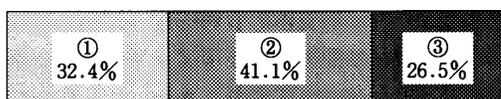


【主たる理由】

- 指導教官が熱心に、教材研究の仕方や指導案の書き方などを指導してくれたから。
- その日の反省や次の授業の話し合いなどが的確にできたから。
- ×教官が多忙で少し時間が不足していた。
- ×実習担当時間が少なかった。

オ 学級指導 (毎日放課後) 担当 学級担任

〔学級経営について、学級生徒の特徴、学級会活動についてなど〕



【主たる理由】

○クラスの現状や学級担任の方針がきちんと説明され、よくわかった。

○子どもたちと1日でも早く仲良くなれるよう、細かいところまで指導してくださった。

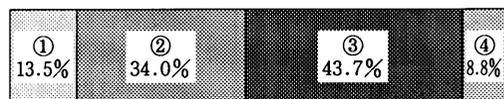
○教科とは違ったものを学ぶことができた。
×学級担任と話す機会が教科ほど多くなかったため十分に理解することができなかった。

(2) 観察参加実習

ア オリエンテーション (50分)

担当 実習主任

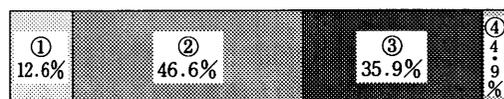
〔実習の心構え、社会人・教師としてのマナー、日程等の説明、日程、観察・日誌の記入等など〕



【主たる理由】

- 着任式で校歌を聞き、心がひきしまった。
- 実習の心構えがわかり、やる気が出た。
- ×周りもうるさく、説明がよく聞こえなかった。
- ×説明の内容、とくに観察記録のとり方やレポートの書き方などわかりにくかった。
- ×学部での事前指導が不十分で、持ち物や提出書類 (着任届・履歴書) などの提出が不十分であった。

イ 観察記録



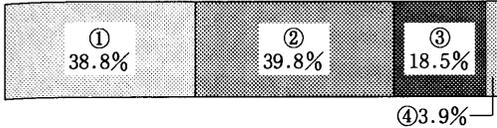
【主たる理由】

- たくさん気づくことがあり、記録していて授業観が変わった。
- 授業での生徒の反応をみるのが楽しかった。
- ×観察や記録の内容、その書き方が不明確でよく書けなかった。
- ×観察授業中、立ちっぱなしでいることは、

体力的にきつかった。

×実習に対する自分の意識不足で内容が充実しなかった。

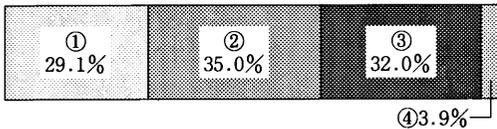
ウ 教科指導



【主たる理由】

- 教科担任が熱心で、よく教えてくれた。
- 新しい授業の方向がわかり、指導観が変わった。
- 楽しい授業が多くみられた。
- 担当教官から、学生の質問によく答えてもらった。
- ×観察授業が少なすぎた。(1日2回)
- ×教科担任と話し合う時間が不足していた。もっと話を聞きたかった。

エ 学級指導



【主たる理由】

- 学級担任から、クラスの実態について詳しく話してもらえたので、クラスの実態がみえてきた。
- 担任が実習生一人一人の話を聞いてくれ、嬉しかった。
- 学級のことだけでなく、人生観についても、担任と語ることができた。
- ×時間不足で、話し合いの場が十分設定できなかった。
- ×クラス名簿などクラスの情報をいただきたかった。(一部のクラス)

【考察】

- ・教育実習については、教科指導で67.6%が「十分満足できる」と答えており、「かなり満足できる」32.4%を加えると、100%になり、全員がこのどちらかに属することから、教科指導については成果を認めることができる。
- ・観察参加実習についても、教科指導で「十分満足できる」「かなり満足できる」を合わせると、78.6%となり、教育実習と同様に考えることができる。
- ・オリエンテーション及び授業と指導案、当校の教育、観察記録の内容については、学生のニーズに応じて改善していく必要がある。
- ・学級指導については、教育実習では「十分」「かなり」を合わせると70%以上が充実感を得ていると回答している。観察参加実習では、その充実度は、教育実習に比して低くなっている。観察参加実習の2.5日という日数が、その結果に影響していると考えられる。

*教育実習、観察参加実習とも不十分な点は、指導案の書き方、観察記録の仕方など、学部での事前指導と関連するものが多い。また、実習での持ち物、提出物の連絡不徹底など、学部と附属の連携が不十分なことが原因となっているものも多い。学部での事前指導の内容の検討や、実習に臨むにあたっての連絡事項の徹底など、十分に図ることが必要である。また、実習期間が、短すぎるなどの物理的な問題点もあげられている。

5. 4 教育実習事前事後指導について

この内容については、アンケート項目の関係で3年次教育実習学生のみを実施した。その充実度については、次のようになっている。



【主要要望事項】

- ・教育法は3年生、事前指導は2年生だったので、指導案の書き方についてもっと時間がほしかった。
- ・模擬授業を取り入れたり、授業の様子をVTRで流してポイントを説明するなど、具体的な取り組みがほしい。
- ・学生たちに、もっと考えさせるような問題提起を必ずしてほしい。なあなあで終わってしまう講義がいくつかみられた。
- ・具体的な生徒の様子にもとづいた指導を期待する。
- ・実際に授業を行うにあたって役立つことを教えてほしかった。
- ・副専攻についても、事前指導はあったほうがよい。
- ・どのような働きかけをしたら子どもが疑問を抱くのかということなどを、教科別に具体的に教えてほしい。

【考察】

- ・「事前指導が実際の教育実習に役立った」を選択した者は0であった。「ある程度役立った」は41%であったが、「あまり役立たなかった」、「全く役立たなかった」、「どちらともいえない」が、全体の約60%を占めていた。
- ・主要要望事項を見ると、具体的な授業に基づく取り組みを要望する者が多く、VTR等を取り入れ、授業場面に応じた対応の仕方などを望む声が多かった。

*基本的な理論は最低限必要であるが、観察参加実習や教育実習という内容の性格を考えると、VTRを取り入れ、具体的な授業場面に即して対応の仕方を考えさせ

たり、IP/TV等*を利用して附属校での授業をデュアルタイムで学部で放映し、授業者の意図、生徒への対応などを検討できるシステムなどの導入が急がれる。

(IP/TVは、附属新潟中学校には試みとして設置されており、活用可能である。)

*事前指導の内容の一貫性・整合性について、再度確認する場と時間が必要である。現在授業を担当している者は、全員で集まり検討する機会もなく、それぞれが1講義ごとに完結している状態にあり、教育実習の事前学習としての機能を十分果たせていない。

*IP/TV：マルチメディアデータ（ビデオ、オーディオ、web）をネットワークで送受信するアプリケーションであり、ライブ放送、マルチキャスト（一斉放送）、オンデマンド配信などができる。

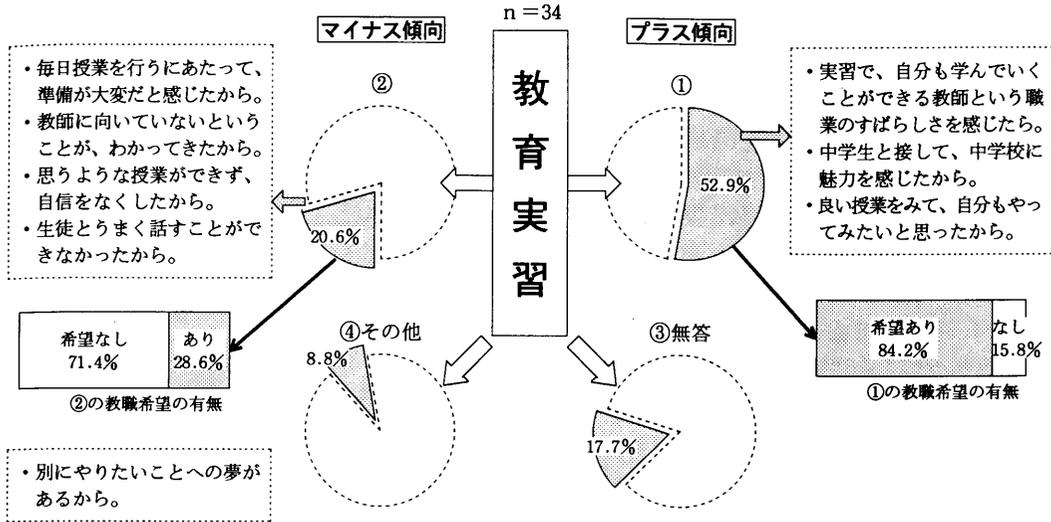
5. 5 教育実習・観察参加実習後の教職に対する意識の変化について

教育実習及び観察参加実習後に、教職に対する意識に、どのような変化が生じたかを探ってみた。

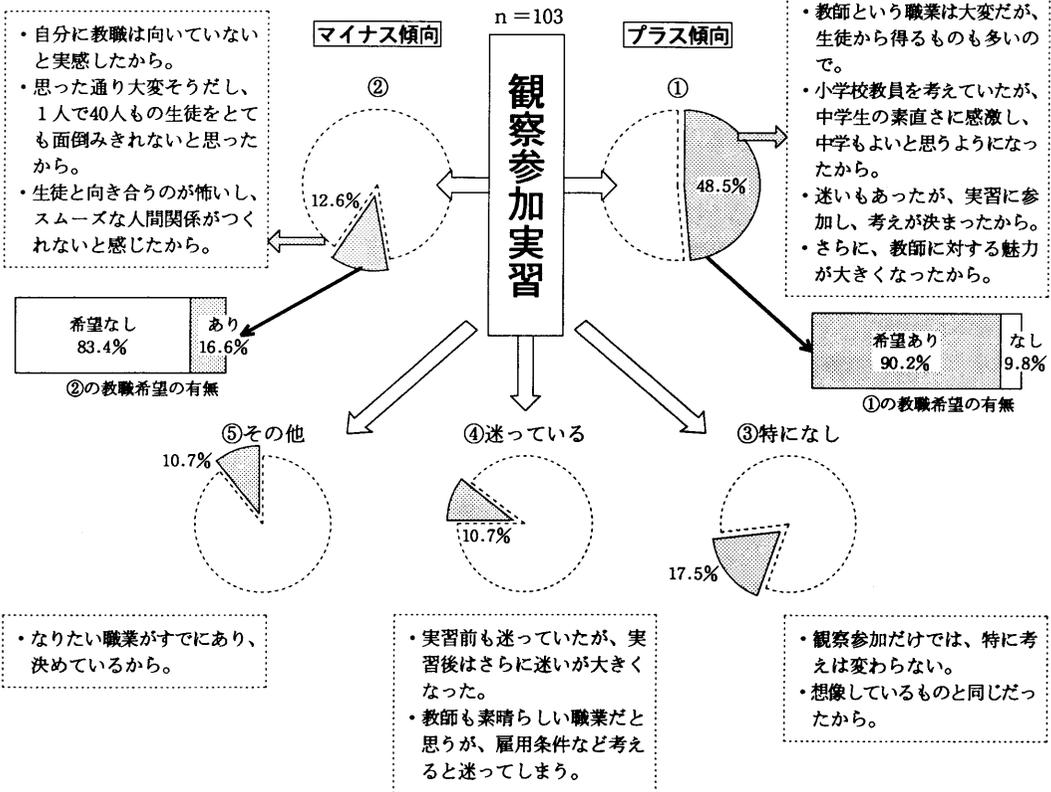
教育実習・観察参加実習とも、「プラス傾向」のものを右側に、「マイナス傾向」のものを左側に示すことにした。

また、「その他」「無答」「迷っている」「特になし」などについては、下方に示すことにした。点線の囲みの中の記述は、それぞれの主な意見である。あわせて、「プラス傾向」「マイナス傾向」の割合の中で占める「教職希望の有無」についても、実践の矢印で、その率を示した。

(1) 教育実習



(2) 観察参加実習



【考 察】

〈教育実習〉

- ・全体の52.9%が、実習によってさらに教職に対する意識を高めている。その理由として「よい授業やよい教師との出会い」を上げている者が多く、実習を通じてよい授業を参観したり、教師と関わることは、大きな意味をもつと考える。
- ・実習校の教師が生徒と心地よい人間関係を作っていることを観察したり、実習生自身が中学生との関わりを円滑にできたことによる成就感なども、プラスの傾向の数字に表れている。
- ・マイナス傾向の原因としては、「授業準備の大変さ」「思うような授業ができず自信を失う」など、実習授業に関するものが多かった。
- ・無答及びその他が26.5%を占めるが、それは、5.1「教職希望の有無」と関係していると考えられる。

〈観察参加実習〉

- ・全体の48.5%が観察参加実習により、教職に対する意識を高めている。その理由は、教育実習と大きく変わっていないが、直接生徒や教師と関わることにより、これまで中学校や中学生に抱いていたマイナスのイメージが変化したという意見も多くみられた。
- ・マイナス傾向の原因としては、「生徒と向き合うのがこわい」「生徒とうまく話せない」など、生徒との人間関係によるものが多くみられた。また、「教師1人で40人の生徒の面倒をみること」の大変さなどもあげられた。
- ・「教師になろうかどうか迷っている」が10.7%、「特になし・無答」が17.5%あり、その2つで28.2%となっている。「なりたい職業がすでにある」は10.7%となっており、これらを合計すると、およそ40%となる。この数値は、5.1「教

職希望の有無」の「無」とほぼ同じような傾向を示している。

- *実習後プラスの傾向を示す割合を5.1「教職希望の有無」との関連でみてみると、教育実習・観察参加実習ともプラスの傾向を示す者は「教職希望有り」が圧倒的であり、マイナス傾向は「教職希望なし」が圧倒的な割合を示している。教職希望の有無が実習の姿勢に大きく影響しているといえる。

5. 6 今後実習を行う後輩へのアドバイス
「これから実習を行う後輩へのアドバイス」という項目で、事前に心がけておきたい点や反省する点を問いかけた。

回答の内容は、2つに大別できる。その1つは「生徒との関わり方」に関するもの、もう1つは「実習に対する心構え」に関するものであった。

「生徒との関わり方」については、

- ・実習生から積極的に話しかけていくことが必要（待ちの姿勢では、生徒と積極的に関わることは難しい）。
- ・「絶対にこうしよう。ああしよう。」と意気込み過ぎると気ばかり焦って、生徒と関わりにくい。活動（例えば、清掃や給食の準備など）を共にしながら、気軽に声をかけることも有効である。
- ・可能な限り生徒の名前を覚え、名前を言いながら話しかけてみる。
- ・笑顔で、気軽に声をかけてみよう。

などがあげられていた。

「実習に対する心構え」については、

- ・学生ではなく、一人の社会人、教師とし

て扱われる。心構えをきちんとして望まないと、得るものが少ない。

- ・ 学生生活とリズムが異なる。早起きの習慣を1週間前ぐらいから整える。
- ・ 授業については、集中して参加し、生徒および教師の対応を十分に把握する。
- ・ 附属の子どもは特別、という固定観念にとらわれず、白紙で実習に参加する。
- ・ 提出物等必要書類については、先輩に聞いたりして忘れないようにする。

などが主な意見であった。

【考 察】

- ・ 現在の学生たちは、教科の内容や、実習授業の進め方など、教育実習・観察参加実習の中心的な内容よりも、人間関係等について、多くのストレスを感じている。とくに、扱い方の難しいといわれる中学生との関わり方について、うまくいかないと答えているものが多い。
- ・ 心構えとしては、「学生ではなく、1人の社会人としての自覚」などや、「生活のリズムの変化に対応すること」の大切さが述べられている。

* ボランティア活動などを積極的に行い、青少年をはじめ、多くの人々と接する経験を積むなど、大学を離れ、社会で人間関係を日常的に育てていく機会を設定していくことも大切である。

* 実習に対する心構え、提出書類等の連絡を学部で確実に行う必要がある。

今後教育実習が4週間、観察参加実習が1週間と延長されることを前提として提言する。

提言1 2年次教育実習事前事後指導について

現行では、2年次の「観察参加実習」までに行う事前研究は、4回予定されており、主な内容は、①オリエンテーション ②授業参観の視点 ③生徒理解 ④附属校の理解と観察参加の課題、となっている。それぞれの講義の詳細については、教育実習事前研究講義要項に示されているが、事前の講義内容及び時数について検討が必要である。とくに大学入学後、初めて小中学校の授業を観察する学生にとって、論理的な講義もさることながら、実際の授業場面を具体的に視聴させる、IP/TVやVTRなどの活用が必要である。さらに視聴覚機器を活用することによって、学部と附属校とデュアルタイムで交流することにより、観察参加実習を初めて経験的に理解することができ、抵抗感の少ない状態で実習に参加することが可能になる。必然的に観察参加実習までに6～8時間の事前研究の時間が必要になる。

提言2 2年次の観察参加実習後に行われる「指導案の書き方」や「学級経営の理解」等について

現行では観察参加実習後、2年次において上記の内容で5回行われているが、実習生のニーズや問題意識を考えると、それらは3年次教育実習の前に行う必要がある。観察参加実習では主に児童や生徒の観察参加が課題となり、略案の書き方は必要であろうが、正規の指導案の書き方まで考えが及ばない場合が多い。むしろ、授業研究を中心にして行う3年次の実習前に「指導案の書き方」や「学級経営の理解」を行うことが大切である。教育実習期間が延長されるまでの間に、これら教育実習事前研究の内容と期間等について検討することが必要である。当然このことは、3年次教育実習後に3回行われる「教育実習事前事後指導」の内容の検討とも密接に関係してくる。

6. 具体的な提言

これまで、この調査を実施してきて明確になってきたことを基に、いくつかの提言を述べる。

提言3 実習校での受け入れ体制について

今後、教育実習・観察参加実習とも期間が延長される。この期間の延長によって、教育実習・観察参加実習ともに「物理的な時間の不足」による問題点は、かなり解消されると考えられる。この機会に実習生受け入れ校である附属学校や公立学校は、実習校における「オリエンテーション」や「実習校指導」の内容とその回数を検討する必要がある。これまでは物理的な時間の不足から、それらのほとんどは実習第1日目に集中して設定され、実習生にとっても十分な理解のないまま、実習に臨まざるを得なかった。今後は、実習期間全体をよく見直し、計画的にそれらを配置して無理なく教育実習とその理論の結合を図る工夫が必要である。

提言4 学部改組等による「教職希望なし」の実習生への対応について

今回の調査でもわかるように、教育実習においても約35%が「教職希望無し」と答えている。観察参加実習では、その比率は40%以上にもなっている。これら、教職希望をもたないものと教職希望を持つものとの比率は、今後ますます前者の増加が予想される。「教職に就く気はないが、一応教育実習がどんなものか経験してみるだけ」というものと、「教育実習で精一杯努力して、よりよい教師になりたい」という意識のものとは、その勤務態度や児童・生徒との関わり、実習授業や観察参加への取り組み、また、エネルギー面でも大きな差があると考えられる。このような状況における教育実習は、どのように行っていくたらよいか、教職希望者が100%近い時代と同様の実習でよいのかどうか抜本的に検討してみる必要がある。

提言5 学生自身の実習に対する取り組みについて

現在の若者たちの特徴として、「指示待ち」であることがよく指摘される。このことは、今回の調査でも明確にあらわれている。何から何まで、学部担当者や附属教官に依存するのではなく、実習生自身が必要な内容を積極的に獲得する姿勢で実習を行ってほしい。これまであげられているいくつかの問題点のなかには、実習生の実習に臨む姿勢によって解決できるものも多くあると考えられる。自ら求めて学ぶ教育実習をぜひ行ってほしい。そのためのインフォメーションの場と機会を確保することが学部において必要であろう。

参 考 文 献

横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター (1998) 「多様化する教育実習教育」－教育実習のミニマムエッセンスとは－附属横浜中学校 p.21-34

添 付 資 料

教育実習、観察参加実習質問紙

教育実習アンケート

No. 1

このアンケートは教育実習について、改善のための基礎資料とすることが目的です。
下記について、回答をお願いします。

教育実習期間	月	日	～	月	日	(日間)
教科名	主専攻		副専攻		男	女
教育実習前での教員希望	あり		なし		(線部は一方に○をつける)	

I 教育実習の充実度について、次の項目のうち最もあてはまる番号に○をつけてください。
また、その理由も、記述してください。

- 1 大変充実しており、得るものが多かった
- 2 苦労は多かったが、得るものもあった
- 3 苦労ばかりが多く、得るものがあまりなかった
- 4 毎日がゆううつで、得るものはなかった
- 5 良かったとも、悪かったともいえない

<理由>

II 教育実習の内容について、次の項目のうち最もあてはまる欄に、それぞれ○をつけてください。また、○をつけた欄は、その理由も、記述してください。(欄が不足なら欄外へ)

	オリエンテーション	授業と指導案	当校の教育	教科指導	学級指導
十分満足できる					
かなり満足できる					
ややものたりない					
不満である					
理由					

観察参加アンケート

No. 1

このアンケートは観察参加について、改善のための基礎資料とすることが目的です。
下記について、回答をお願いします。

観察参加期間	月	日	～	月	日	(日間)
教科名	_____		主専攻	副専攻	男	女
現在の教員希望	_____		あり	なし	(_____ 線部は一方に○をつける)	

I 観察参加の充実度について、次の項目のうち最もあてはまる番号に○をつけてください。
また、その理由も、記述してください。

- 1 大変充実しており、得るものが多かった
- 2 苦労は多かったが、得るものもあった
- 3 苦労ばかりが多く、得るものがあまりなかった
- 4 毎日がゆううつで、得るものはなかった
- 5 良かったとも、悪かったともいえない

<理由>

II 観察参加の内容について、次の項目のうち最もあてはまる欄に、それぞれ○をつけてください。また、○をつけた欄は、その理由も、記述してください。(欄が不足なら欄外へ)

	オリエンテーション	観察記録	教科指導	学級指導	
十分満足できる					/
かなり満足できる					
ややものたりない					
不満である					
理由					

III 観察参加の期間(2.5日)について、意見感想・要望等がありましたら、記述してください。

IV これから観察参加を受ける学生に、アドバイス (事前の準備や生徒と接するときの心構えなど) がありましたら、記述してください。

V 観察参加を終えて、大学卒業後の進路に変化がありましたか。項目に○をつけ、理由があったら記述してください。

変化があった	(なぜ→)
	(どんな職種→)
変化がなかった	(なぜ→)

VI 観察参加全般について、感想や意見、要望等がありましたら、記述してください。